

二〇二二年度 三田学園中学校入学試験問題

前期A日程 国 語

〈注意〉 各問題の解答はすべて解答用紙に書き入れなさい。

※出題の都合上、漢字にふりがなをふる、漢字をひらがなにするなど、本文の一部に改変を行っています。

※特に指示のない限り、字数制限のある問題では句読点や記号も一字として数えます。

受験番号	
------	--

一、次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

まず、次の問いについて考えてみたいと思います。

そもそも勉強って、あれをやれ、これをやれと、その内容を事細かに決められ、強制されてやるべきものなんですか？  
もつとも、「なんで『こんなこと』をやらなきゃいけないの？」と日ごろ疑問をもっていたとしても、さすがにみなさんも、<sup>①</sup>読み書き算くらは学んでおいたほうがいいし、社会のルールなんかも、やっぱりある程度は学んでおいたほうがいいと思っただけです。だから、「なんでこんなこと」をやらなきゃいけないの？」と感じるのは、「これって何の役に立つの？」と疑問をもつものに対してだろうと思います。

<sup>注2</sup>古文をやれ、<sup>注3</sup>漢文をやれ、古代ギリシャやローマの歴史をやれ、元素記号を覚えろ、<sup>注4</sup>微積分をやれ（以下延々つづく）と、わたしたちは、将来役に立つかどうかもわからないことを、毎日何時間も勉強させられます。

多感な青春時代のこのたいせつな時期に、いったいどういわれで、わたしたちは『こんなこと』をやらされなきゃいけないのでしょうか？

まずは、世間でよくいわれる、ちょっと説教くさい『正論』を見てみましょう。

世間では、勉強が強制される理由について、だいたい次の二つくらいのことがいわれるんじゃないかと思えます。

（a）、学校で学ぶ内容は、そのほとんどが、社会（つまりわたしたちみんな）にとっては、だれかにマスターしてもらわなければ困るようなものだ、というものです。

（b）、多くの高校生が「微積分なんて何の役に立つんだ」と思っていますが、これがなければ、わたしたちの科学技術文明はまったく成り立ちません。橋をかけるのにも、人工衛星を打ち上げるのにも微積分は必要です。

（c）、だれかが微積分をマスターしてくれないと、わたしたちの社会はどう成り立っていかないわけです。

だから説教くさい話をすれば、学校は、わたしたちの社会生活を成り立たせるために必要なことを、子どもたち・若者たちに無理やり学ばせるところなんだということができます。

（d）、そこで次の疑問もわいてきます。

だからって、「なんで『このわたし』が『そんなこと』をやらなきゃいけないの？」という疑問です。

社会にとって微積分が必要だというなら、それが得意な人だけがやればいい。古文だって、それが好きで職業に活かせる人だけがやればいい。英語でさえ、自分は一生使わない、という人は、別に今ほど勉強させられなくていいかもしれない。そんなふうに思う人も、多いんじゃないかと思えます。

そこで二つめの『正論』はこういいます。

「長い人生、いつ学校での勉強が必要になるかはわからないのだ」と。

たとえば、「自分はパン屋になりたいから英語なんて必要ない」と思っている人も、ある時どうしても海外から<sup>②</sup>ユニークしたいパンが見つかって、英語で交渉しなければならぬ時がくるかもしれないかもしれません。「自分は哲学をやるんだから微積分なんて必要ない」と思っている人も、その一〇年後、これからの哲学を進めるためにはどうしても経済学が必要だということに思い至り、経済学を学ぶために微積分が必要に……なんてことも、あるかもしれません（何を隠そう、これはわたしの話です）。

と、こんなふうに、「なんで学校で『こんなこと』を勉強しなきゃいけないの？」という問いには、説教くさい答えとしては、「社会にとって必要だから」というのと、「いつか必要になることもあるかもしれないから」というのがあげられるわけです。

が、ここでみなさん、ちゃんとピンときてくれたでしょうか？

<sup>③</sup>たしかにこれは『正論』です。でも、これが唯一絶対の正解というわけではありません。もしみなさんが納得できるなら、みなさん自身の勉強する意味の一つに加えておけばいいのです。

とはいっても、一応正論は正論です。ちゃんと筋が通っているから、まあある程度受け入れておいて損はないだろうとわたしは思います。

でも、いくら「社会にとって必要だから」とか、「いつか必要になることもあるかもしれないから」とかいわれても、やっぱり「なんで『こんなこと』を強制的に勉強させられなきゃいけないんだ」という疑問は、完全には晴れないんじゃないかと思えます。

というのも、結局『こんなこと』やっても将来役に立たないんじゃないかという疑問を、わたしたちはどうしてもぬぐえないからです。

それはほんとにその通り。実際、受験勉強で得た知識なんて、大学に入ればまず大半は忘れてしまっし、社会に出ればその多くはほとんど使うこともありません。【A】

ただし誤解のないようにしておきたいと思いますが、たしかに学校で学んだ知識は、全部が全部まるまる役に立つわけではありません。でも社会で必要な知識の大半を、わたしたちは実は学校で学んでいるのだということも、忘れてはならないことなのです。【B】

わたしたちはよく、学校で学んだことなんて何の役に立たない、などといってしまっています。でもこれは明らかに、「一般化のワナ」にはまった見方です。【C】

でもちょっと考えればすぐわかります。みなさんは、学校に行かずにそもそも本書を読めるようになっていたでしょうか？ 読み書きの能力だけではありません。今では、多くの仕事があるからか、<sup>④</sup>センモンの知識・技能を必要としています。そうした知識・技能の多くは、やはり学校でこそ獲得できるものなのです。【D】

エンジニアになりたいのなら数学の、小説家になりたいのなら文章表現の、世界で活躍するビジネスマンになりたいのなら世界の地理や歴史の知識・教養などが必要です。そしてそうした X・Y・Z を、わたしたちは結局のところ、学校のおかげで手に入れられているのです。【E】

とはいももの、やっぱりあれもこれも全部強制されるのは、どうも割に合わないというか、非合理的な気がします。だって、あれもこれも勉強しても、結局多くは忘れてしまうし、社会生活でもそんなに必要にはならないんだから。

ということで、改めて、なんで「こんなこと」を強制的に勉強させられなければならないのか、という問いを考えてみることにしましょう。わたしの考えはこうです。

まさにおっしゃる通り。あれもこれも、「こんなこと」を大量に強制的に勉強させるなんて、やっぱり非合理的なのです。

知識をどれだけいっばいため込んだところで、その全部が役に立つわけではないし、第一、多くの人はそのかなりの部分を結局忘れてしまします。だからわたしの考えでは、学校は本来、すぐ忘れてしまうような細かい知識を大量につめ込むじゃなくて、どうすれば「学ぶ力」を最大限はぐくむことができるかと考えるべきなのです。

そう、学力とは、<sup>⑤</sup>「どのつまりは「学ぶ力」のことなのです。

みなさんがいつか出ていく実社会や職業の世界は、多くの場合、知らないことだらけ、学ばなければならないことだらけです。わたしたちはさまざまな場面で、さまざまなことをみずから学んでいかなければなりません。

だから、知らないこと、わからないことがあれば、それをそこでちゃんと「学ぶ力」があるということ、このことこそが重要なのです。細かい知識をため込むより(もちろんそれも一定たいせつではありますが)、この「学ぶ力」をどれだけ自分のものにできているか、ということのほうが、はるかに重要なことなのです。

自分の直面した問題をどうすれば解決できるか考え、そのために必要なことを「学ぶ力」。これが学力の本質です。やがて忘れてしまうような知識の量は、学力の一部ではあっても本質ではないのです。

(苦野一徳『勉強するのは何のため? 僕らの「答え」のつくり方』より)

(注)

- 1 読み書き算……「読み・書き・計算」のこと。
- 2 古文……古い時代の日本の文章。
- 3 漢文……古い時代の中国の文章。
- 4 微積分……「微分」・「積分」ともに、高等学校で学習する計算。
- 5 微積分……「微積分」のこと。

問一 ——部②「ユニウ」、傍線部④「センモン」をそれぞれ漢字に改めなさい。

問二 (a) s (d) に入る語として、最も適当なものをそれぞれ次の中から選び、記号で答えなさい。

ただし、同じ記号を二度以上用いてはいけません。

ア でも イ つまり ウ まず エ たとえば オ もし

問三 ——部①「読み書き算くらいは学んでおいたほうがいい」とありますが、そのように考える理由は何ですか。それを説明した次の文の空らんに入れるのに最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

・読み書き算は日々の生活において、( ) な勉強だから。

ア 実用的 イ 強制的 ウ 一般的 エ 効率的

問四 ——部③「たしかにこれは「正論」です」とありますが、「これ」の指示内容を、六十字以内で答えなさい。

問五 次の一文を補うのに最も適当な箇所を、本文中の【A】 s 【E】の中から選び、記号で答えなさい。

【「役に立たない知識がある」という経験を、「何もかも役に立たない」と大げさにして、一般化してしまうのです。】

問六 本文中の空らん X・Y・Z に当てはまる言葉として最も適当なものを、本文中から抜き出して答えなさい。(順不同)

問七 ——部⑤「どのつまり」の意味として、最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア だいたい イ 結局 ウ いわゆる エ 本来

問八 筆者は学校がどのような場所であるのがふさわしいと考えていますか。それを説明した次の文の空らんに入る内容を四十字以内で答えなさい。

・学校は、社会に必要な知識を強制的に学ぶだけではなく、【(四十以内)】ための場所。

問九 本文の論の展開として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 勉強を強制されることへの疑問を示し、それに対する「正論」を示している。その後、「正論」を完全に否定している。

イ 学校での勉強が無意味なことを主張し、勉強に対する「正論」を示している。その後、「正論」を肯定している。

ウ 勉強を強制されることへの疑問を示し、それに対する「正論」を示している。その後、「正論」とは別の立場を述べている。

エ 学校での勉強の必要性を主張し、勉強に対する「正論」を示している。その後、「正論」の問題点を述べている。

問十 次は、本文を読んだあとの生徒たちの会話です。これを読み、あとの問いに答えなさい。

Aさん 「たしかに、強制されて勉強するのはやる気がでないよね。」

Bさん 「そうだね。でも、強制されてする勉強の必要性も理解できたから、もう少し真面目に宿題に取り組んでいこうと思ったよ。」

Cさん 「たしかにね。『どうして毎日漢字ドリルや計算ドリルをやらなくちゃいけないの?』と置いていたけど、幸せになるためには必要不可欠だって分かったよ。」

Dさん 「知識は、私たちが社会で生きていくうえで必要なものだもんね。」

Bさん 「でも、筆者が言っている通り、学校で学ぶ大切なことは知識だけじゃないって思うんだ。」

Cさん 「それに、私たち学ぶ側の生徒達が、もっとしっかり授業を聞くようにしていかないかね。」

Dさん

Aさん 「なるほど。大きな視野で考えることも必要だね。」

1. この中で、一人だけ筆者の考えと異なる発言をしている者がいます。それは誰ですか。A～Dの記号で答えなさい。

2. に入れるのに最も適切な文章を、次の中から選り記号で答えなさい。

ア へえ、そうかもしれないね。でも、授業を受ける態度が変わっただけで、成績が大きく上がっていくのかなあ。

イ それは違うんじゃないかな。授業を聞いているだけなら、結局いつまでたっても指示待ち人間のままだよ。

ウ そういう考え方もあるかね。でも、もっと大切なことは、何を身につけようとしているのかを知ることだと思うよ。

エ うんうん。でも、「授業を聞く」と言うよりも「授業に参加していく」と言うほうがもっと前向きになる気がするね。

二、次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

一度、樹絵里から「クーちゃんって意外とものごさだよね」と言われたことがある。①そのときは大いに不本意だったけど、実はまるきりの外れというわけでもない。

私はやらなきゃならないことなら、それが宿題だろうとテスト勉強だろうと、自由研究という名の強制的な研究だろうと、早めにきっちり済ませるタチだ。けれど、別にみんながやらなくてもいいこと、誰がやってもいいようなこと、ましてやボランティアみたいなことだと、全体の空気を読みつつ、やらないで済ませられるならぜひとも逃げたいと思ひ、その方向に動く(まあそういう場合って、手を挙げないとか、率先してまで行動しないとかなので、「動かない」と表現した方がふさわしいのかもしれないけれど)。

部が発足してまだ日が浅いけれど、中村先輩は「率先して動く」タイプだってことはなんとなくわかる。樹絵里はそういう人に引きずられて、

X 付和雷同的に動くタイプ。

② 齋藤先輩はどうなんだろうと、ふと思う。

もちろん、率先タイプじゃない。むしろ、テコでも動かないって感じ。でも、私の「動かない」は自分がラクしたいためだけ、齋藤先輩のは明らかに違う。だってどう考えてもラクなんかじゃないよ、誰も支持してくれないクラブ活動を、たった一人で一年間も続けるなんてこと(果たしてそれが、活動と呼べるものであったかどうかはこの際おいておくとして、だけ)。

私はちらりとその人の方を見やった。

ベランダの手すりに上半身を預けて、ただ、空を見上げている。

太陽は斜めに傾き、薄雲が走る。明るい、きれいな空だ。その前で、黒い染みのように先輩はたたずんでいる。その学生服の背中に向かって、思わず声をかけていた。

「齋藤先輩は、どうして空を飛びたいんですか?」

びっくりとしたように黒い肩が揺れ、カミサマ部長は **I** 振り返った。

「だって、君だって飛びたいでしょ?」

何を当たり前のことをと言わんばかりに、先輩は言う。

「そんなこと、考えたこともないです」

そう返す私に、「本当に? 一度も? 小さい子どもの頃も?」と、畳みかけるように先輩は言う。「商店街でもらった風船につかまって、空高く飛んでいきたいって、考えたことはない? ほうきにまたがって、飛べたらいいなって思ったことはない? ドラえもんタケコプターが欲しいって思ったことはない?」

そう追及されて、私は犯行を自供するみたいに答えた。

「それは、子どもの頃は、あるかもですが……」

「誰だって、あるんだよ」むやみと断定的に、部長は言った。「空飛ぶ夢を一度も見たことのない人間なんて、一人だっているわけはないんだ」

「夢って、起きて見る方ですか、それとも寝て見る方?」

恐る恐る尋ねると、先輩は **II** 言った。

「どっちにしたって、大して変わらないでしょ」

④ いやあ、けっこう変わると……大いに変わると思うんだけど。

「君さ、風船おじさんって、知ってる?」

いきなり思いがけないことを言われて、私は首を傾げた。

「……え? あの、大道芸とかで、長い風船使ってウサギとかキリンとか作ったりする人のこと?」

「全然違う」

⑤ ……なんだよ、人が一生懸命答えたのに。

「じゃー、なんですかー？」

もはや義務感からだけで、超おごなりに尋ねてやった。ああ、早く樹絵里が来ないかなあ。

「本当に知らないのか。すごく有名な人だぞ」

なんでかなあ、「無知に呆れ果てた」って言っているように聞こえるよ。

斎藤先輩は、仕方ない、教えてやろうと言わんばかりの様子で教室の中に戻ってきた。戻ってこなくても良かったのに。

「風船おじさんは、空が飛びたかったんだ。だから、体にヘリウム風船をたくさんつけて、多摩川の河川敷から大空に飛び立った」

「飛び立って、どうしたんですか？」

「大田区の民家の上に落ちて、屋根を壊した。幸い、おじさんは無事だったけど」

「ずいぶんは迷惑な人ですね」

「冒険するのはそもそも迷惑なものなんだよ」と先輩はなぜか偉そうに胸を張る。

「そして風船おじさんは同じ年の十一月に、巨大な風船をたくさんつけた、檜の風呂桶みたいなゴンドラに乗って、再び飛び立った」

「懲りないですね。で、今度はどこに落ちちかたんですか？ 空から檜風呂が落ちてきたりしたら、かなり危険ですよね」

「どこに落ちたか、それともどこにも落ちていないかはわからない」

「え？」

「太平洋を横断すると言って飛び立って、二日後にSOS信号が発信されて、それきり行方不明になっている」

「……うわあ」

なんとコメントしてよいやらわからない。無事だったら、軽い怪我で済んでいれば、「なんてバカなんだろう」と言えるんだけど。いや、家族

みたいな気安い間柄で、テレビのニュースでそれを見たのなら、「バカだなあ」って笑いあっている、きっと。

「みんなが、彼をわらった」

ふいに、怒ったような声で斎藤先輩は言った。心を読まれたような気がして、どきりとした。

「ほとんどはわらう資格なんてないんだ」強い口調で先輩は続ける。「一生、地面に貼り付いたままの連中になんて。地球の重力から自由になりた

いと思わない連中になんて」

怒ったような、じゃない。確かに、斎藤先輩は怒っていた。

いつも、一貫して偉そうで、ほとんど表情の動かない先輩が。他人のために、たぶん、会ったこともない人のために、猛烈に怒っている。

ふーん、と思った。

「……斎藤先輩は、本当に空を飛びたいんですね」

我ながら、妙にしみじみとした言い方だった。斎藤部長はふっと力の抜けたような顔をし、それから窓の外を眺め、おそらくはそこから見える空の切れ端を眺め……そして言った。

「うん、そうなんだ」

その気持ちに、ウソはないんだろう。それはよくわかった。もとよりその点を疑っていたわけでもない。だけど……。

「なら、いつまで地面に貼り付いているつもりですか？」

強い口調で言っただけ。先輩はびくりしたようにこちらを見やる。

「ぼんやり空を見上げたり、本を読んだりしてるだけじゃ、いつまで経っても空なんて飛べませんよ。今すぐに動きださなきゃ。飛行機だって、離陸のためには勢いつけて走り出すでしょう？」

言ってみればそれは、唐突に燃え上がった炎だった。

自分でも不思議だ。中学生が空を飛ぶ。そんなの、無謀で荒唐無稽で誰が聞いてもわらうようなことだ。

なのに、本当に自分でも信じがたいことに、斎藤先輩の「空を飛びたい」という願いに、私は強く共感してしまったのだ。

斎藤先輩は飛びたがっている風なんだと、ふと思った。誰かが糸を引いて走り出してやらなきゃ、きっと一生、空なんて飛べやしないのだ。

これは、誰がやってもいいようなことじゃない。だって誰もやらないよ、こんな馬鹿でなんの得にもならないようなこと。

「……クーちゃん？」

ドアのところから、Ⅲした樹絵里の声がした。そのままそこにいるから、仕方なくこちらが廊下に出てやることにする。樹絵里は私の腕を引き、少し離れたところへ連れて行った。

「クーちゃんさ、今、斎藤先輩とすごく話、弾んでなかった？」

私は黙って首を振る。弾んだうちに入らないよ、あんなの。

（加納朋子『少年少女飛行倶楽部』より）

（注） 大道芸……路上や街頭などで行われるさまざまな芸。



問十 ———部⑦について、「糸を引いて走り出」すとは、どういふことのとえですか、説明しなさい。

問十一 本文の表現の特徴の説明として、最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 「私」と「部長」の視点を何度も入れ替えることによって、物語をテンポ良く展開している。  
イ 「……え?」「……うわあ」「……くーちゃん?」など「……」を用いて、その場の静けさを表現している。  
ウ 「太陽は斜めに傾き、薄雲が走る。」「明るい、きれいな空だ。」のように景色の描写を利用して時間の経過を表現している。  
エ 「ドラえもんタケコプター」「飛行機」「凧」など、空に関する具体例を多用することで、部長達の大空への憧れを表現している。  
オ 「黒い染みのように先輩はたたずんでいる」「カミサマ部長」など、比喩を用いることによって、近寄りたが部長の様子を表現している。

三、次の(1)、(2)の会話文の空らんに入る最も正しい敬語表現をあとから選び、記号で答えなさい。

(1) 先生「矢野さんの作文はとてもよく書けていました。」

生徒「先生、私の作文も見て( )。」

ア くれますか イ もらえますか ウ いただけますか エ さしあげますか

(2) 先生「高畑さんのお母さんは欠席ですか。」

高畑さん「はい、( )。」

ア 母はそう申しておりました。

イ 母はそう話されていました。

ウ お母さんはそう言われていました。

エ お母さんはそうおっしゃっていました。

四、次の①～⑤の説明にあてはまる熟語を、ア～コからそれぞれ二つずつ選び、記号で答えなさい。ただし、同じ記号は二度以上用いてはいけません。(順不同)

- ① 意味が反対の漢字を組み合わせたもの。
  - ② 上下の漢字が主語と述語の関係のもの。
  - ③ 下の漢字が上の漢字の目的語になっているもの。
  - ④ 上の漢字が下の漢字を修飾するもの。
  - ⑤ 長い熟語を略したもの。
- |      |      |      |      |      |
|------|------|------|------|------|
| ア 決心 | イ 国営 | ウ 曲線 | エ 売買 | オ 誤読 |
| カ 利害 | キ 特急 | ク 負傷 | ケ 腹痛 | コ 国連 |

五、次の——部の表現が正しい場合は「○」を、正しくない場合は「×」を、それぞれ解答らんに答えなさい。

- ① 自分の実力を鼻にかけ、他人を見下すような態度をとる。
- ② 社長は顔が立つ人で、交友関係が広い。
- ③ 議論がよい方向へ進んでいるのに、腰を入れるような発言をしないでください。
- ④ 彼の素晴らしい演説に、みんなが舌を巻いた。

六、次の——部のカタカナを漢字に改めなさい。

- ① 農民たちが畑をコウサクしている。
- ② コミュニケーションをハカる。
- ③ 王として国をオサめる。



